

本を選ぶ

NO.435 2021年(令和3年)8月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

<http://www.las2005.com>

本社 〒114-0002 東京都北区王子 4-23-4 TEL=03-6908-4643

- <ろん・ぼわん>電子版 続々
- 司書の眼 第45回
- 文学者 1800人の墓碑と死にざま
- 「ヘッドネーション」をご存知ですか
- 「今しかできないことを」－フランス旅行①

●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

電子版 続々

大新聞の朝刊の一面の下段には書籍や雑誌だけの広告がずらりと並ぶ。出版物以外の広告を雑品広告と呼んで区別しているが、サンケイのように一面での出版広告をやめてしまった新聞を除いて、雑品広告が一面下に登場することはない。地方紙も含めて新聞の顔とも呼ばれる日刊紙朝刊に続く独特な広告慣習が戦後間もなくから続いている。3段分を8等分した小さくて細長の通称サンヤツ。そして雑誌の発売日には6等分したサムツも登場する。

各社指定の子持ち罫が枠取っているサンヤツやサムツなどの広告の規格を新聞各紙は小枠広告と呼んでいる。前号でも触れたように朝日はとりわけ広告掲載規定が細かいが、他社もそれぞれ広告掲載規定をもうけている。共通するのは、表紙などの画像や図版は一切認めず、記号類や罫線も限定された上で指定された範囲の大きさの書体だけで表現しなければならない点だ。

少し古いが手許の『出版広告の話』(村崎和也著／日本エディタースクール出版部／1978)には当時の出版広告について詳しい解説がある。さらに古いが『三段八割秀作集』(森田誠吾編／精美堂／1972)という私家版には、美しくレイアウトさ

れたサンヤツが紹介されている。

10年ほど前から朝日には原則毎月5日に「児童書広告企画」としてカラー版のサンヤツが登場する。さらに夏休み近くになると、児童書の広告が毎週カラー版となって並ぶ。通常は雑誌限定のサムツをカラー版で児童書分野にふり向けてさえている。もちろん読売や毎日の紙面でも表紙をカラーで掲載したサンヤツが並ぶ。各紙が紙面制作を電子化したので実現した進化だ。色づかいが重要な要素である児童書の表紙が一面下に並ぶのは読者に対する印象も強い。新聞購読の年代層からして明らかに祖父母が孫たちに贈るのを狙った広告企画である。同時に、購入先である町の本屋さんも視野に入れた宣伝戦略の一環となる。出版社側が全国の書店に対してそうした広告情報を直前に流して、事前の仕入れ注文を促すのだ。

ベテランの図書館員から聞いた話だが、新聞で見たというメモを片手にこの本が読みたいという利用者がかつては日々やって来たという。詳しく確認すると、いつの新聞なのか紙名についても不正確なケースがままあったそうだ。ほとんどは一面下の広告で見たという。最近はそのようなクエストはかなり減ったらしいが、年配の人たちにとって新刊の書籍情報としては健在のようだ。近所の本屋さんでも似たような話を聞いた。昔に比べれば注文自体が明らかに減ったのは時代の流れで仕方ないが、新聞広告はないよりはましだという。

電子化のメリットを生かすために、新聞にはまだまだ工夫や仕掛けの余地があるはずだ。(埜村 太郎)

司書の眼 第45回

—バレットジャーナルから砂浜図書館まで—

鷹野 祐子

手帳ノート術

次の原稿では、これを書こう！と決めていたのに、いざ書く時期になると忘れてしまう。さらに、緊急事態宣言のために、職場に出勤する日と自宅でテレワークする日がでてきて、日々の家庭と仕事と趣味の壁とルーティンが崩れてしまった。毎年使っているスケジュール帳はマンスリーと自由記述のシンプルなものだが、いまは日々の予定がたくさんありすぎて書ききれない。また、会議だの面談だのの記録を日付順に書いていくと、何がどこにあるのかわからなくなり、予定をすっぽかす始末。どうにかスケジュール管理をしなければ、と大事なものを記載したテンプレートを作って手帳に貼ってみたものの、予定が変更になったり、いろいろなイベントの予約と支払いが前後になったりとうまく管理できない。そんなときに図書館から手元に来たのが、『バレットジャーナル 人生を変えるノート術』（ライダー・キャロル／ダイヤモンド社／1999）であった。「バレットジャーナル」は、文具好き、手帳好き、スケジュール管理好き、PDCAサイクル好きな方なら知っている、有名な手帳ノート術である。

もはや手から離すことができないスマートフォンには、お財布、スケジュール管理、TODOリスト、趣味のアプリ、情報交換、小遣い稼ぎ、最新ニュース、テレビ、音楽などなんでも入っている。もはやリマインダーなしには暮らしていけない人もいるだろう。日々のスクリーンタイムは3-4時間以上、目は疲れる、着信音が気になる、そして使えば使うほど充電がたりなくなりはいらないかと気が休まらない。来週のスケジュールを見ようと思ってスマホを探し、気がついたら何十分もTwitterをみていたという経験もあるだろう。スマホの機能でアイコンをモノクロにしたり、アプリごとの使用時間を制限しても、あと15分、と無意識に延長してしまう。そんな現代社会の暮らしに登場したのが、ザ・手書き・アナログ記録のバレットジャー

ナルなのである。始め方はいたって簡単。ノートと鉛筆があれば始められる。

著者であるデジタル製品デザイナーのライダー氏は、集中力が続かないという特性凸凹があり、社会に適応するために自分で生み出した手帳術が「バレットジャーナル」である。基本的にはタスクを中点（・）を使って箇条書きにしていく。これを英語ではBullet（バレット）というので、「バレットジャーナル」という名前なのである。まず、ノートにはインデックス分の空白をつくる。そして、全ページにページ番号を振り、よくある手帳のように月の予定にすすむが、まず見開きに6か月分の欄をつくり、その月になにが予定されているか、を書いておく。これをフューチャーログと呼ぶ。こうすることで、未来の予定について悩まなくても済むようになり、半年を見渡すことができるようになる。次にマンスリーログを新しいページに作成する。このマンスリーログは当月（月末なら来月）の部分だけを作成し、その月の予定をフューチャーログから写してくる。マンスリーログができれば、デイリーログとして、今日の日付（もしくは夜なら明日の日付）を新しいページに書き、中点（・）でタスクを箇条書きにしていく。このとき、簡潔にかくことが大切で、本書を読むとそのルールが書いてある。

手書きの利点

ここまで読むと、一般的な手帳と同じく予定を管理するもの、という印象があるだろう。しかし、バレットジャーナルの利点はここからで、デイリーログで進捗を管理し、達成できなかったものを未来へ引き継げるようにしていくことなのである。私のように、荷物は背負えるだけ背負いたいタイプの人はこのタスクを書き、進捗を管理するというところで、タスクが多すぎて挫折することが多い。七つの習慣手帳を挫折したのは私だけではないはず。そして、手書きの文字が汚いと自

分でも知っている人は、なるべく手で書くことを避けたがる。これもライダー氏は心理学的に手書きのものは記憶に残る、というエピソードで補完してくれている。どんなふうに行けばいいか迷う人は、「バレットジャーナルの作り方」と検索して動画や記事を見てみよう。みんなカラフルに素敵な手帳に変身させている。でもバレットジャーナルに必要なのは、“ばえる”手帳ではなく、私の思考を可視化することなので、まったく気にすることはない。気が向いたら、蛍光ペンなどでマーキングしてもいいが、それを継続しようと思うのはやめよう。最初から完璧を目指さないのは、バレットジャーナルの仕様は常に進化していくから。毎日はいつも真っ白なページから始められ、大事なことはインデックスにページを書いておく。インデックスをつけることで、自分の思考を俯瞰することができる。そして忘れることができるのである。

もう一つ特徴的なのは、ログの振り返りである。朝と夜の2回、一日の活動について振り返る。また、月末に次月の予定を確認し、今月に残したタスクについて精査していく。今月やり残したタスクをすべて引き継いだら、いつか予定はパンクしてしまう。必要のないもの、重要ではないものは、先に繰り越してもいいし、削除してしまってもいい。それを意識させてくれ、毎日の負担を軽くしてくれるのだ。

魔法のノートを手に入れる

この欄に、月初めにはまったく違うことを書こうと思っていて、それがかなりまとまって頭の中にあり、書き始めるのを楽しみにしていた、はずであった。でも、テレワークとオリンピックで全く新しい生活に変化してしまい、昔の考えが思えだせないでいる。人間は本当に変わりやすい。同時進行で読んでいる『Think clearly 最新の学術研究から導いた、よりよい人生を送るための思考法』(ロルフ・ドベリ/サンマーク出版/1999)で、やっと最近シンプルに物事を考えられるようになってきた。自分の「能力の輪」をつくり、その

内側に時間を費やす。せわしなく動き回るのを控え、何事にも落ち着いて、長期的に取り組むこと、そんな生活を「バレットジャーナル」が応援してくれている気がする。「どこに注意を向けるかで、幸せを感じるか決まる」を可視化してくれるのである。

「バレットジャーナル」は手帳好きな日本人なら当たり前のスケジュール管理術に思えるのだが、気に入っているのは、毎日を真っ白なところから始められること。やりたくなければ先延ばししてもいいし、削除もできる。「やりたい事=やらなければならない事」ではない。毎日忙しい人ほど、何をしたのか、何をするつもりなのかを記録してみるのをおすすめだ。また、はじめのころ、手書きが負担で仕方がなかった。どうにかテンプレートを作って楽ができないか考えたが、ジャーナル自体が変化していくので、手書きのほうが結局便利なのだ。未来は今日の続きではなく、いつでも変更できるという魔法のノートを手に入れた感じなのである。

Do the hokey pokey

ステイホームも長らく続くと、キャンプにもしばらくいけず、道具のメンテナンスもおそろかになっているが、世間は第三次キャンプブームとか、ワーケーションとかでアウトドアがブームになっている。筑波総研の地域経済レポートでは、コロナ禍の地域経済への影響は、訪日外国人・インバウンド消費の大幅な減少など既に深刻なものとなっており、対面型が多い観光産業は、これまでのビジネスモデルを大きく転換せざるを得なくなっている。しかし既存の施設の改修で新しいサービスを発信しているところもある。昨年の夏には、感染症の影響で海水浴が開設できなかった茨城県の大洗サンビーチで砂浜図書館がオープンし、大きな話題となった。季節や時間限定としても、既存ものを工夫して能力の輪の内側を磨くことにより、たくさんの魅力を発信することができるのではないかと思う。

(たかの ゆうこ：医学系研究所図書室)

文学者 1800人の墓碑と死にざま

— 『文豪墓碑大事典』 —

太田 基樹

「墓マイラー」という言葉がある。著名人の墓参りをする人たちのことだが、この事典の著者は30年以上前、そのような言葉がなかった頃から、文学者達の墓を訪ね、写真を撮ってきた。

実は、江戸時代には「掃苔」（そうたい）という言葉があり、古い墓を見つけ、苔むした墓を洗い、泉下にいるであろう人物に思いを馳せ、線香をあげ、手を合わせて偲ぶということが行われていたという。

著者は長きにわたり、全国の墓碑に赴き、墓前に額づき、故人と無言の対話を交わしてきた。文学者の「死にざま」を通して人生観を教えられたと、この事典の「はじめに」に記している。

いわゆる「文学者人名辞典」の体裁ではなく、文学者の死因、最後の言葉、絶句や絶歌、近親者の回想を中心にまとめているところに本事典の特徴がある。著者が人生観を教えられたという「死にざま」に焦点をあてているのだ。

文学者には自殺した人が多くいる。ではなぜ自殺するのか。死を迎えるのを運命に委ねるのではなく、自分が死ぬのは自分で決めるという考えであったという。また、死ぬ間際まで原稿を書いていた文学者もいる。「死にざま」は人それぞれであり、作家の作品以上に人間性が出てくる。

本事典は1,000ページ近くあり、束幅は約6.5センチ。本の見た目にまず圧倒される。明治17年から平成31年4月までの135年間に亡くなった近現代文学者（作家、歌人、詩人、俳人、劇作家、評論家、思想家、哲学者など）の墓所の所在地が判明したものを没年順に収録したものである。約1,800人を取り上げている。

これだけの分量であることから、執筆には時間がかかったし、編集作業も膨大になった。この事典が進行し始めたのは約10年前。それ以前から著者は墓を訪れ、写真を撮ってはいたが、さらに追加の取材を重ねてきた。遺族の諸事情で墓が移転したとい

う情報が入れば、新しい墓所を訪れた。こうしたこともあり、取材はなかなか終わらない。原稿を書き始めても、圧倒的な分量をこなさなければならず、大変な時間がかかることになった。その間に当時の担当者は定年を迎え退職し、私が引き継いだのがおよそ5年前。ようやく原稿が完成したのが3年前で、

編集実務はそこから2年近くかかることになる。

本書には多数の写真が掲載されているが、その写真はすべて墓である。著者が撮影したものだ。

多数の写真原稿を前にして、印刷の担当者と、ついオカルトな話になってしまった。心霊写真のような物があるかもしれないし、夜に編集作業をしていると怖いなという思いもしてきた。

そのことを著者に投げかけたことがある。化けて出てきたら怖くないです

かと尋ねると「向こうから会いに来てくれるなんてありがたいことだ。出てきたら質問したいことはいくつもある。話をしたい」という返答であった。物書きとしての好奇心の旺盛さと、文学ならびに文学者への愛を感じた言葉だった。

著者が残念に思っていたのは、訪れたい墓所であっても、お参りをするのが叶わないことがあったということだ。個人情報保護法により、墓碑についての情報を遺族が拒否したり、お参りができない墓所があったのだ。著名な文学者であっても本事典に掲載されていないのはこのような理由である。

その一方で、平成8年2月に亡くなった司馬遼太郎氏の妻・福田みどりさんは、読者から「司馬さんの墓参りがしたいが、場所がわからない」といわれたので、司馬ファンや文学愛好者の希望に応じて墓所の所在地を公表している。このような情報公開は大変喜ばしい。

巻末には人名総索引とともに、墓碑所在地の都道府県別の索引も載せている。

(おた もとき：株式会社東京堂出版)



『文豪墓碑大事典』工藤寛正／B5判／ハードカバー／952頁／定価44,000円（税込）／2020年7月／東京堂出版

「ヘアドネーション」をご存知ですか

— 『31cm ～ヘアドネーションの今を伝え、未来につなぐ～』 —

田口 京子

ヘアドネーションとは、寄付された髪の毛からウィッグを作り、そのウィッグを子どもたちに無償で提供する活動です。2009年に、本書『31cm』の監修者であるNPO法人JHD&C(以下ジャーダック)が、日本で最初に始めました。活動を始めた当時は「ヘアドネーション」という言葉すら知られていませんでしたが、現在では七五三や成人式などの節目で行われたり、夏休みの自由研究の題材として取り上げられたりするなどして、大人から子どもまで年間10万人以上が参加する活動になっています。

しかし、私自身ヘアドネーションについて詳しく知っていたわけではありません。本の企画をいただき、その取材をする上で多くのことを知りました。そんな中で強く思うことがありました。それは、誰も傷つかずに社会が変われば、ということです。取材中に、ある事情で自死された方がいることを知りました。テレビなどにも出て、明るく活動されていた方なのですが、突然亡くなってしまったのです。どんな人でも人前に出て何かをする時、多くのエネルギーを使います。ましてや見た目や差別などのテーマだとそれ以上に途方もないエネルギーを使います。

またある方は、「劣等感から、自分に付加価値をつけるために、人前でウィッグを外して活動を続けていましたが、ある時、人前に出ない普段の自分は、洗濯物を干しにベランダに出ていく時はすかさずウィッグをつけるような、ウィッグを外して生活することができない自分だということに気づいた」と言っていました。もちろん、ウィッグをつけずに生活することだけが正解ではありませんが、それでも鎧に身を固めて活動を行っていても、いつか疲れてしまうかもしれません。その方たちも社会を変えるために行動しているのだと思います。しかし、その結果として本人が傷つくかもしれない。自分のせいではなく、社会の固定概念によって苦痛を強いられ、

それを解決するためにも苦痛が伴う。

その方たちの中には、自分のためだけではなく、自分以外やこれからの子どものために行動している方も多いと思います。そのことによってエネルギーを貰えることもあると思いますが、それでもいつか疲れてしまう日が来るかもしれません。



『31cm ～ヘアドネーションの今を伝え、未来につなぐ～』
監修：NPO法人JHD&C(ジャーダック) / A5変型/並製/216頁/オールカラー/2,200円(税込価格) / 2021年6月 / KuLaScip(クラシップ)

そうでなくとも、やはり誰かが傷つく必要なんてあるのでしょうか。だからこそ、本というモノを通して、社会を変えていければと思いました。本人が直接テレビなどに出ることに比べたら、インパクトは弱く、影響力は少なくなるかもしれませんが、無理に人前に出なくとも、本を読んで共感してもらうことで、少しでもモノの見方が変わってくれば嬉しいのです。

髪の毛がないことに対して、社会の意識が変わってくれば嬉しいのです。例えば、自分たちの何気ない発言に傷つい

ている人がいる。ハゲやヅラって笑っていることで傷ついている人がいる。そういうことを知るきっかけになって欲しいのです。状況に違いはあっても、大きさに違いがあっても、同じようなことを感じることはあると思います。そういうことに共感することで、少しでも身近に感じて欲しいのです。

ジャーダックの活動の目的は「必ずしもウィッグを必要としない社会」です。それは、ウィッグをつけるも、つけないも、どちらも当たり前本人が選択することでき、そのどちらの選択も尊重される社会です。

活動を開始して12年目を迎え、今、ヘアドネーションの認知は広まっています。そんな今だからこそ、ヘアドネーションという活動とともに、ジャーダックの目指す「必ずしもウィッグを必要としない社会」という考え方を知る人が増えていくことで、少しずつでも社会が変わっていけばと思っています。(たぐち きょうこ：クラシップ)

「今しかできないことを」－フランス旅行①

溝上 牧子

前回「今しかできないことを」という文章を書いたが、友人のことに終始したところで終わってしまった。ありがたいことに、あなたのことも聞きたいと言って下さる方がいて、今回はその、お金もないのに行ってしまった、7年前のフランスへの旅で感じたことを少し書いてみようと思う。

2013年の春が来て友人は美術研修へとフランスに旅立った。旅に行くとは決まったものの、日程が決まったわけではない。具体的なことは白紙のまま。向こうに着いた友人からのいつ来るのかと聞かれ、はてと考える。その頃、旅に出たくて仕方なかったけれどお金がなくてずっと旅をあきらめていた。旅をする目的は毎度違うが、日常から離れて、非日常に身を置くことで自分を取り戻すこと、見たことのない、行ったことのない場所に行くのも目的の1つだ。とはいえ小心者の私はなかなか一人旅はできないし、今までも国内がほとんどで海外は数か所しか行ってないのだが。

今回の旅の目的は2つ。数年の間にたまった私の中にある澱を浄化すること、そして友人らが暮らす場所を生活するという目線で見る旅をしたかった。別にどこに行かなくても友人の家に行き一緒にスーパーや市場で買い物したり、ご飯を作ったり、そこらへんの道を歩いたり、日本でやるように喫茶店でお茶を飲んだりしたかった。フランスには数年前から、もう一人友人が住んでいて、彼女は南仏のアルルに住んでいた。パリとアルル。その2箇所に行けばいいなと漠然と考えていた。Fのところに行くんだ〜と別の学生時代の友人2人に話すと「わたしも行きたい!」といつのまにやら、日本からは3名で向かうこととなる。現地の絵が描きたい画家の彼女の希望も入れて、4名でフランス国内のパリ市内、南西部、南仏と数か所を巡る旅をすることになったのである。大人数は苦手だがこの人数ならなんとか大丈夫だろう。しかし人が増えればみんなの希望をとりまとめるのが大変かもなと漠然と思った。いい

加減な私は、数日は二手に分かれて行動してもいいのだしと軽く考え、さりげなく「何日か別行動しよう」と提案したらその中の一人と陰悪なムードになってしまった。「一緒に行くのに別行動って?」ということのようだ。私としては子どもじゃないんだし…と思ったのだが、人はそれぞれ価値観が違うのだと思い知った。

話し合いの結果、移動や宿泊先は一緒にし、どこかの一日の数時間をそれぞれの自由時間にしようかと話がまとまった。結果、別々に行動したら得られなかった楽しさも多々あったことは認めた。絵描きの彼女が行きたかった、美しい小さな村々は一人で行くには経費がかかり過ぎるが、皆で行くならタクシーをチャーターして回ることが出来る。また数人で泊まるので、宿も様々な種類の宿にチャレンジできた。

この旅で何が楽しかったと言われるといろいろあるのだが、旅そのものの楽しさは当然のことながら、旅のプランを立てている間がなによりも楽しかった。旅立つ1、2か月前から現地に住む2人の友人と連絡を取り合い、情報を交換しながら本屋でヨーロッパの列車の時刻表を買ってきて時刻を調べたり、どう回るかを決めたり、それを叶えるため、宿やタクシーの運転手と、どんな交渉をするか考えたり。まずは日本語で内容を考え、英語に自信のない私は、以前は高校で英語を教えていた父を頼りにした。しかし年をとった父の仕事ぶりはのんびりで…みるみる時間も迫ってきた。しかたなく最初のメールの翻訳だけお願いしたあとは、時間の短縮のため、自分にできる範囲の簡単な英語を組み合わせ、英文を作り交渉した。相手も英語が母国語でないのは幸いで、片言でも言いたいことは伝わったようだ。頼る人がいなければ、人はいざとなると無理してでも力を出そうとすることが経験からわかった。今回はこのお粗末な力でどこまで希望を実現できたかをお届けしたいと思う。(みぞかみ まきこ：朔北社)

★以下は、株式会社皓星社が発行する雑誌記事索引データベース「ざっさくプラス」の最新情報を伝えるメールマガジンからの一部転載です。

★ざっさくプラスニュース

【zoom 商談・使い方ガイダンス 始めます】

Zoomを使ったご案内を始めます。ご契約機関様には使い方の案内を、導入をご検討中の機関様には商品説明をさせていただきます。

1回30分単位～ご予約いただけます。ご予約や、トライアルのお申込みは<https://clt1154809.bmetrack.com/c/1?u=C8DC083&e=12ADAC0&c=119EF9&t=0&l=1579CC17&email=ieLWnDL7I1Y%2BRwWc4EFBfnnlkrjLubPe&seq=1>こちらから。

【閉鎖するデータベースのデータ、お引き受けします】

ざっさくプラスは、閉鎖予定のデータベースのデータを引き取り、続けて公開します。かねてより、図書館関係者の方から「科研で作られたデータベースで、非常に有益なものなのに、教授の退官時や公開サイトの閉鎖時に消滅してしまうものが多い」という声を聞いておりました。そうしたデータを消さず、拾い上げたいと考えています。方法は主に以下の2通り。

①データを引き取り「ざっさくプラス」に連載。(無償)

②独立したデータベースとして引き取り連携検索して検索結果を「ざっさくプラス」と共に一覧表示。(費用等応相談)

どちらも検索結果に元のデータベースのデータであることを示すアイコンを表示します。

詳しいお話をお聞きになりたい方、<https://clt1154809.bmetrack.com/c/1?u=C8DC084&e=12ADAC0&c=119EF9&t=0&l=1579CC17&email=ieLWnDL7I1Y%2BRwWc4EFBfnnlkrjLubPe&seq=1> お問い合わせフォームよりご連絡ください。

【先月からの新規登録情報】

○独自登録分

「フォークロア」第1号(平成6年3月)～第7号(平成7年3月)

※本阿弥書店の民俗学誌で「俳壇」の臨時増刊。年6回刊で全7冊。谷川健一、山折哲雄、内藤正敏、杉山二郎、中瀬喜陽らが執筆。特集は「暮らしの中の「七」」(2号)、「遠野への視座」(5号)、「占い」の民俗(7号)など。

「処女地」第1号(大正11年4月)～第10号(大正12年1月)

※島崎藤村が発行した婦人文芸誌(処女地社)。鷹野つぎ、生田花世、横瀬多喜、辻村乙未らが執筆。白帝社からの複製版あり。先日、永渕朋枝著『無名作家から見る日本近代文学 島崎藤村と『処女地』の女性達』(和泉書院)が出た。

「紅(紫紅会)」第1号(昭和31年2月)～第150号(昭和64年1月)

※札幌市の岩田醸造会社内紫紅会発行の随筆雑誌。森本三郎、湊正雄、外山滋比古、亀山巖、坂本一敏、福本和夫、蘭繁之、吉阪俊蔵、五所平之助、風巻景次郎、河邨文一郎、更科源蔵らが執筆。最終号の総目次より登載。

「FRAME」1号(1990年7月)～3号(1991年10月)

※Idee Pressの美術理論誌。阿部良雄、岡崎乾二郎、松浦寿夫、小林康夫、松枝到、上田高弘、上野俊哉、北澤憲昭、岡崎京子らが執筆。テリー・イーグルトン、針生一郎らのインタビューも。全3冊。

「労働婦人」第1冊(昭和2年10月)～第73冊(昭和9年2月)

※日本労働総同盟婦人部の機関誌。赤松常子、赤松明子、斎藤健一、鈴木文治、阿部静枝、藤島けい子らが執筆。法政大学出版局からの複製版あり。

「物語」創刊号(平成2年7月)～第2号(平成4年7月)

※砂子屋書房の国文学・民俗学誌。赤坂憲雄・兵藤裕己・百川敏仁の共同責任編集。古橋信孝・三浦佑之・高木史人らが執筆。特集は「折口信夫以後」(1号)、「都市と物語」(2号)。3号は南島論の特集が予定されているが、2号以降未見。

「著者と編集者」1巻1号(昭和44年12月)～18号(昭和47年3月)

※東洋出版(と創紀房)の「著述者と編集者のための専門誌」。美作太郎、福島鏗郎、高崎隆治、進藤純孝、内村剛介、横尾忠則、吉村昭らが執筆。特集は「検印と検印廃止について」(1号)、「太宰治と編集者」(3号)など。

「甘辛春秋」秋の巻(昭和43年10月)～冬の巻(昭和48年12月)

※老舗和菓子屋・鶴屋八幡の季刊PR誌で、有名な食味雑誌「あまカラ」の後継誌。創刊号の巻頭は志賀直哉・里見弴の対談。司馬遼太郎、小松左京、今東光、坂口謹一郎、土井勝らが執筆。全22冊。



<https://zassaku-plus.com>